

2023年9月16日作成

2023年度(令和5年)
学校関係者評価委員会議事録

学校法人石川学園
横浜デザイン学院専門課程

評価対象年度2022年度(令和4年)

開催日時 2022年9月16日 10:00～12:00

場所 学校法人石川学園横浜デザイン学院 211教室

外部委員数 4名

＜出席名＞

花井 秀年	DOORS合同会社 代表社員
羽田 宜弘	ウェイブリンクス株式会社代表取締役
山口 禎子	山口会計事務所 公認会計士理事
片野坂達也	卒業生(2013年3月卒業)

内部委員 8名

＜出席8名＞

池田 俊一	横浜デザイン学院学院長
寺内 有紀夫	同副学院長
志村 信生	同戦略企画部 統括部長
平澤 毅	同総務課課長
横坂 仁美	同キャリアサポートセンター長
廣田 洋平	同高等課程長
佐久間みのり	同日本語学科教務主任
小林 亜希子	同総合日本語科教務主任

1) 池田学院長の挨拶

現在石川学園を取り巻く外部環境が変化している。令和7年より改正私立学校法が施行され、私立学校のガバナンスに関する問題をきっかけに、評議員と理事を分けることが必須になった。また来年4月より日本語教育機関認定法が制定され、日本語学校の教育について国が審査することとなり、この認定を得ることが最重要事項と捉えている。あわせて日本語教師の地位を向上するため日本語教師の国家資格化がされる。パブリックコメントを募集しているので学校として意見を述べていくことを準備している。

杉之子幼稚園は施設型給付幼稚園に変わる手続きを進めている。定員要件に対応できるように木造建築物やプレハブを撤去するなど園内の整備工事を進めている。昨年の出生数は79万人で内2万人が外国人をルーツとしていた。西区は子供の減少率が緩やかだが、教育の質を上げて経営を安定させたい。横浜デザイン学院の学生数は現時点で420名だが、10月生が入ると480名になる予定です。

2) 在籍状況と卒業生の進路状況について(志村・横坂)

志村より、在籍状況について別途資料をもとに説明。

- 現状422名だが10月生が入ると482名となり、短期の20名を含めると約500名となる。
- 今年4月から総合デザイン学科として統合した。デザイン分野は1、2年合わせて102名、その内留学生は15名。
- 総合日本語科は40名から20名に定員を縮小、日本語学科の定員を増やした。コロナの影響により学生が日本語学校を卒業する留学生の減少に伴い総合日本語学科を希望する者も減少した。

横坂より、就職状況について別途資料をもとに説明。

- 昨年度の卒業生のうち、デザイン分野と総合日本語科の就職希望者は全員就職先が決定した。
- デザイン分野では、デジタル系を含む職種が最近増えている。
- 総合日本語科の就職先での業務は国際業務が含まれるサービス、物流、貿易、管理業務など。
- 日本語学科の学生は、母国での学歴、職歴を生かした就職をしている。システムエンジニアやアートのキュレーターとして就職した学生もいた。
- マンガ分野は希望が変化してきた。卒業後は特定の企業に就職するのではなく、作家としての将来の活動を考える学生が増加している。
- 現在の2年生の現時点での内定者は希望者に対して約30%が内定している。マンガ分野では2Dイラストレーターでの就職が決まった学生がいる。

3) 2022年度 学校自己点検の評価について説明

項目1. 教育理念・目標について(志村)

- 現在の岸田政権で、教育未来創造会議が行われている。その中で、第一提言では留学が、第二提言ではDXが取り上げられている。我々もリアルとDXの両方を大事にしつつ、日本語教育も活用していきたい。
- 最近では地域に根ざした教育活動を重視している。デザインの出張授業、チャレンジスクール、職業体験といった、神奈川県専門学校各種学校協会が運営する小中学校との連携事業に積極的に関与している。
- 今後、留学生40万人計画について、教育にどう落とし込んでいくかを検討している。
- 日本語教育機関認定法が来年施行されるため、それに向けて準備をしている。
- 日本語学科の定員を280名に増員した。
-

項目2. 学校運営について(平澤)

- 3年前からGoogleWorkspaceを導入、また昨年より校務システムを導入、運用している。

- 今後の課題・改善方策として、教職員のシステム操作の習熟度を高めること。非常勤講師を含めた講習会を行っている。また電子帳簿保存法とインボイス制度に応じて、清算などのシステム利用の拡充も進めている。

項目3. 教育活動について(寺内)

- 就職に直結したインターンシップは進んでいるものの、企業連携からインターンシップへの流れができていない。今後企業連携を先を見据えて選んでいきたい。
- ラグビーチームのキャノンイーグルスとの連携を進めており、昨日もプレゼンを行った。ロゴマークの変更に伴いユニフォームを廃棄することになり、SDGsの観点から有効活用できないかという案件で、総合デザイン学科として良いテーマと捉えていました。ファッション分野の学生にとっては縫製、マンガイラスト分野・デザイン分野の学生にとってはアイデアを出すという共通の課題であった。この取り組みはTVKのニュースで放送予定でしたが、残念ながら、当日のニュースの影響による変更により放映されなかった。
- 高等課程ではファッション甲子園で2連覇を果たした。

項目4. 学修成果について(寺内)

- 課題は教職員に関する評価を上げること。年に2回の授業見学などは設けているが、より活用したい。

項目5. 学生支援について(寺内・小林)

- 教室の改修工事を行い図書室を再整備した。美術関係の本も揃え、自習スペースを確保したことにより、利用者が増加した。今後はデジタル環境を整備していきたい。
- 将来の世の中の変化を見据えた求められるスキルに関する検討が課題と捉えている。また社会人学生のニーズ(リカレント教育)の展開を検討する必要がある

項目6. 教育環境について(平澤)

- 耐用年数を超えた設備の修繕し設備の可用性を上げることが求められている。電気設備の大規模更新工事の実施を予定している。
- 昨年、災害対策委員会を発足、災害時における対策の検討をしている。講師を招いて教職員向けにAEDや心肺蘇生、応急手当の研修会を開催した。
- ICTを利用した教育を実践していくためのネットワーク利用環境は充実していると考えている。教職員と学生に無線LANのネットワーク利用アカウントを配布して、学内で自由に使えるようにしている。

●

項目7. 学生の受け入れ募集について(志村)

- 課題は、ファッション分野の学生が少ないこと。総合デザイン学科は定員を達成はしているが、当該分野を志望する学生のニーズをつかめてないと思われる。また総合日本語科は外的要因により将来的な定員充足が困難と予想されるため、定員を20名に変更した。
- 昨年から家族滞在ビザ、定住ビザ、日本国籍を持つが日本語を母語としない「外国人等」も募集できるように募集要項を変更した。総合デザイン学科には、留学生ではない外国ルーツの学生がいる。
- 神奈川県専門学校各種学校協会の「仕事の学び場」や、職業教育の振興協会、定時制の協会などと連携し、デザイン分野の職業について告知活動は引き続き行っている。
- 2023年度から専門課程はWeb出願をスタートした。動画を作るなどで、わかりやすい形にしている。
- X(旧Twitter)での広報活動に力を入れていて、学生の作品を集め、定期的に投稿をしている
- 専門課程と高等課程のオフィシャル動画を作成、Webサイトで公開している。

項目8. 財務について(平澤)

- 会計監査、財務に関する情報公開は毎年実施している。
- 令和4年度の決算では、石川学園全体で黒字となった。監査も適切に行われた。
- コスト上昇や円安で支出増が見込まれるため、来年度から学費を約14%値上げすることとした。
- 支出を抑えるため、適切な物品購入をするようにガバナンスを徹底している。
- コロナが落ち着いたため日本語学科の学生数が回復。生徒納付金も令和3年度を上回り、社会的な物価上昇に応じて教職員、非常勤講師の給与のベースアップを実施。

項目9. 法令等の遵守について(平澤)

- 学校はISOの認定が義務化されていない。将来、義務化されることがあれば対応する方針。
- 日本語学科は職業実践専門課程ではないが、法務省告示校としての法令には遵守している。

項目10. 社会貢献・地域貢献について、項目11. 国際交流について(志村・佐久間)

- 職員も学生も地域貢献のため、清掃といったボランティア活動をしている。
- 地域連携として、神奈川専門学校各種学校協会が主催する小中学校への連携プロジェクトにかかわっている。
- 昨年度、地域で日本語教育を受けられない方へのオンライン日本語教室を実施。
- 教育財団からウクライナ難民への奨学金を給付する制度に横浜デザイン学院も申請している。
- ベトナム出張の際、卒業生と会うことができ、横浜で、横浜デザイン学院で学べてよかったという声をもらった。こういった事例を作り、情報発信をしていきたい
- 高等課程と留学生との交流も進めている。昨年は美術大学進学セミナー、今年は鎌倉遠足やオーブンクラスなど。
- 現在約10校の高校に留学生を派遣し、国際交流の授業を実施している。
- 小学校への母語支援ボランティアとして留学生を派遣し、宿題などのサポートを行っている
- 日本語教育機関認定法の施行に先駆け、7月に文化庁の方を講師として呼びし、勉強会を開催した。地域の日本語学校の先生にも声がけしてお越しいただいた。
- ウクライナ難民への奨学金は、全国から86校、110件が採択された。神奈川県は2校が申請し、横浜デザイン学院は9名が採択された。この件に関し、地域の高校生からの取材依頼もあった。
- リカレント教育として、夏休みにインターネットに関する講師をお招きし、地域の方々に向けた公開講座を実施した。今後も継続して企画したい。

4) 外部委員からの自己評価に対する質問と回答、意見等

<外部委員・意見質問>

ある地域の学校関係者の集まりで、洞察力や道徳などの能力不足は学校あるいは家庭のせいなどの質問に対して、家庭のせいとする回答が9割に上ったという話がありました。さまざまな理由や状況もありますが、まずは学校側が自身の責任だと認識することが重要だと考えます。横浜デザイン学院は一燈照隅という教育理念を掲げていますが、その教育理念はどのように学生に伝えているのでしょうか。

<学校側回答>

学院長は人間力の成長を重視しており、高等課程には人間学の授業を設置しています。専門課程では、授業の中で社会性や人間関係の学びをカリキュラムに取り入れています。例えば、グループワークでは人生観・価値観の違う人たちが集まり、うまくいかないこともあります。その際には学生と話をし、人との関わり方や洞察力の重要性について伝えています。これは、クリエイターとしてのデザイン思考にもつながるものと考えています。

<外部委員・質問意見>

Z世代は主体性や個性、独創性を重んじた教育を受けていますが、その反面、小学校や中学校ではあまり叱られることなく育つ環境で育っており、協調性にやや欠けるのではと感じます。今後、このような学生への指導方針はございますか。

<学校側回答>

漫画・イラスト、デザイン、ファッション分野は、そうした要素が強い学生が面白い作品を生み出すことがあります。頭の良い学生の作品は、組み合わせるのが上手ですが、どこかで見たことがあるものに感じることも多いです。個性や独創性が強く、そして会社に遅刻するような人が良い作品を作ることもあります。協調性を重んじるだけの指導では才能は伸びません。

<外部委員・質問意見>

高校でキャリアの授業を担当していますが、高校生たちは主体性を持つことの重要性を理解してもらうのが難しい。「自立」と「自律」のバランスから、主体性が生まれるのではないかと考えています。現在の学校教育では「自立」の教育は行われていますが、自分自身で立てた規範に従って行動する「自律」は社会が多様化しつつあるため、自らが方向性を定めるのが難しいと感じる。特に就職活動は「自律」が問われている。横浜デザイン学院では就職率が向上しているが、どのような取り組みをしたのか。

<学校側回答>

就職サポートは一人ひとり丁寧に実施するのが専門学校、また学校の大きな教育特徴である。コロナ禍では企業も苦しく、就職率が低かったが、去年から企業側も変化してきた。主にデジタル分野の人材の需要が増えており、学生の就職先もその業界にフォーカスしつつある。留学生はサービスや物流の就職が増えてきてる。学校として、常に業界動向に注目しながら学生に紹介している。

<外部委員・意見質問>

学校と卒業生とのネットワークはあるか。

<学校側回答>

卒業生が就職先企業に在校生と訪問して結びつけたり、就職実績のある企業にインターンシップの参加、また卒業後の就職・転職支援をすることもあり、学校と卒業生との連絡などは一部行っているが、積極的にネットワークを形成するなどの仕組みなどはない。

<外部委員・意見質問>

自分が係っている専門職大学では、実業家の先生が多く、その先生の企業への就職も可能である。学内ベンチャーや起業支援も国内トップレベルであり、フリーランスや起業経験を持つ外部講師も招いて指導している。横浜デザイン学院でも経営資源を活用し、これらの取り組みを参考に活動範囲を広げていくことを提案する。

<外部委員・意見質問>

職場の新人の中には、仕事を教えてもらうのを待つ受動的な人が多く見受けられる。わからないことがあれば積極的に調べるようにしてほしいと思っている。あまり自主的でない学生には、どのような指導をするべきと考えているか。

会計事務所への就職を希望した学生が、仕事内容とのギャップからうつ病を発症した事例があった。本人の希望と適性が異なる場合の対応について、どのように考えているか伺いたい。

<学校側回答>

近年の学生は興味のあることだけに集中する傾向があると感じている。それは留学生も同様で世界的にそのような傾向にあるように思う。学生がやりたいことがわかれば、分野を変えるなどの対応をしている。そのような対応を可能にするため、ファッション、デザイン、マンガを統合した総合デザイン学科とした。

病気を持つ学生に対しては個別対応が必要である。該当する学生には、親御様との面談を実施している。オンライン面談も活用し、学生とのコミュニケーションを図っている。進級・卒業を希望する学生に対しては、本人と保護者等を含めた相談を行い、心身の健康回復をサポートしながら、休学や退学も含めた選択肢を提案している。

<外部委員・意見質問>

自らの将来像が持ててなく、学習意欲が低い学生にはどのような対応を行っているのか教えていただけますか。

<学校側回答>

将来像が定まっていない学生には、まず目標設定をサポートしています。目標設定によって学習意欲が向上する学生もいれば、さらなるサポートが必要な学生もいます。最初のきっかけを与えることに教員は最適なサポート方法を模索しています。

<外部委員・意見質問>

私は高校卒業後に大学に行けず、この学校に入学した。入学後に自分がやりたいことを持つことができた。近年、若者はSNSで目にする成功体験を鵜呑みにしがちな傾向があると感じます。また、若者の自主性も変化しているように感じます。独立志向がある人が増えていると感じるので、フリーランスになった際の税金などのお金に関する授業があると良いと思う。

<学校側回答>

将来、働くイメージが持てるように給料や年収、税金、社会保険の仕組みの話などを授業でしている。それにより将来への関心を高める学生もいます。非常勤講師には、横浜で質のいい野菜を提供するサイトを作って成功されている方がいるが、ご自身の成功事例を話してもらっている。また、コロナ以前には年金事務所の方に来てもらい、講演を行ったこともあったので、実施を検討したい。

<外部委員回答>

学生の自主性を育てるためには、リアルの授業が必要だと感じる。コミュニケーションと技術指導のバランスについてどのようにお考えでしょうか。

<学校側解答>

コミュニケーション能力は非常に重要であると考えます。制作した作品を効果的にプレゼンテーションするスキルや、コミュニケーションによって作品が評価を下げることもあることを理解することが重要です。本校のカリキュラムでは、産学連携の機会を設け、実践的なコミュニケーション能力を養うことを重視しています。学生の中には、学生時代に意味がないと感じていた授業が、卒業後に役立ったと実感するケースもあります。学生が授業の意義を理解できるよう、各カリキュラムの目的を明確に伝えるようにしています。

< 学校側質問 >

高校では通信制の学校を志望する生徒が増加しているとのことですが、コロナの影響によるオンライン勤務の増加やテレワークの普及を踏まえ、実際の職場の様子についてお聞かせいただけますか。

< 外部委員回答 >

採用において、リモート環境がない企業への応募を拒否する若者が増えています。これは、情報量の増加や社会全体におけるタイムパフォーマンス重視の傾向が影響していると考えられます。その結果、学校に通って学ぶことが非効率的に感じられるようになり、全日制教育のあり方も変化していく必要があるでしょう。

近年、全日制高校では、通えない学生へのサポートとして通信制コースを設けた学校もある。ある県では、通信制高校の進学者が2倍に増加したというデータもあります。

< 外部委員回答 >

韓国では、普段の買い物も外出せずに配達を頼むことが主流になりつつあり、中国では大型店舗スーパーの閉店が相次いでいます。一方、日本ではコロナの収束に伴い、店舗への来店客数が増加しています。人間は対面でのコミュニケーション機会が減少すると、他人への配慮が欠けやすくなるという課題があります。デジタル化は社会的な大きな流れであるものの、教育においては対面での指導を重視すべきだと考えます。

< 外部委員の回答 >

経理業務については、リモートワークを避けるべきであると強く主張します。作業者の人格や背景を理解せずに、顧客の財政情報などの個人情報扱うことは難しいと考えている。機密情報を頻繁に扱うこの業務においては、長年勤務している者であっても、特段の事情がない限り、テレワークは許可すべきではないとしています。新入社員に対しては、テレワークを許可することは絶対にあり得ません。もちろん、テレワークが可能な業務分野も存在しますが、顧客の核となる業務はリモートワークで行うことはできないと考えています。

< 外部委員の回答 >

デザイナーは、スキルが向上すれば単独で仕事をこなせるようになり、その場合テレワークが望ましい状況も考えられます。しかし、スキルや経験が浅い時期には、上司や同僚から直接フィードバックを受けたり、顧客先に訪問して打ち合わせを行ったりすることで、より多くの学びを得ることができるので、テレワークは望ましくない。

5) まとめ(寺内)

今回はいつも以上に一步踏み込んだ話を伺えて、多くのアイデアを頂きました。頂いたご意見をもとに次の学校のビジョンを考えて参ります。

以上